

## 環境文明社会づくり あれこれ (51)

### 源流 (51)

日本の公害対策を、脇役ではあるが最後まで被害者に寄り添ったのは、科学者、専門家であった。特に医師の貢献が目立つ。私が直接、間接に関与した顕著な例を三つ挙げる。まず不知火海沿岸漁村で奇病（原因不明の中樞神経疾患）の患者が発生していることを最初に保健所に届け出た（1956年5月）のは、後に原因企業と認定されることになるチッソの付属病院の細川一院長であったことはよく知られている。同医師は、この奇病の原因としてチッソ水俣工場の廃水の疑いが濃くなると、工場内で動物実験を繰り返し、59年10月には、アセトアルデヒド酢酸工場廃水によって直接ネコに水俣病を発生させることを検証した。この結果はついに発表されずじまいになったが、この事実は広く専門家の間では知るところとなったという。

一方、水俣病患者の拡がりにより、熊本大学医学部は県からの原因究明の研究依頼を受けて「水俣病研究班」を組織し、公衆衛生、病理学、生化学、衛生学等の教授陣が踏ん張り、工場廃水により汚染

された水俣湾産の魚介類やヘドロから有機（メチル）水銀化合物を抽出、結晶化することに成功した。しかし、これで水俣病対策が軌道に乗ったわけでは全くなかった。中央の業界や政府内には「駅弁大学の教授らに何がわかるか」と言わんばかりの雰囲気があった（宇井純さんによる）中で、東京工業大学の清浦雷作教授らによる「有毒アミン説」発表などのゆさぶりもあり、すぐにはまともな対策に結びつかなかった。

1968年9月、ついに政府（厚生省）は「熊本水俣病はチッソ水俣工場のアセトアルデヒド酢酸設備内で生成されたメチル水銀化合物が原因」と、遅まきながら断定するに至った。1965年の新潟市阿賀野川流域での昭和電工の鹿瀬工場の廃水による第二水俣病発生も受けて、政府はこれ以上の先延ばしは許されず、真剣に取り組まざるを得なかったとはいえ、熊本大学の医師たちの奮闘がなければ、この時の政府見解の発表はなかったと思われる。

水俣病に関しては、1963年頃の学部学生時代に、私は同じ研究室の修士課程に在籍していた宇井さんに連れられ

加藤 三郎

て、水俣の現地などを数日間訪ねたことはあったが、それ以降は石牟礼道子さんの『苦海浄土』や原田正純さんの『水俣病』や『水俣病は終わっていない』などを通して、水俣病による被害患者や家族の怒り、悲しみ、社会の偏見などを知った。

医学者らの原因究明がスピーディーに進んだにも関わらず、地元の原因企業、行政、そして中央政府の対策（工場廃水の海への排出止めと被害者の救済と賠償など）の遅れにより被害者の数が急増した。それに加え、第2水俣病が発生した（当時の担当課は公害課ではなく、同じ局の食品衛生課）ことに衝撃を受けた医師出身の橋本道夫公害課長は、チッソや昭和電工と類似の工程を持つ国内の同種工場での水銀の使用状況、さらに廃水の処理や放流先の緊急実態調査は公害課が関係県の強力を得て実施することを決めた。類似工場は全国に何か所もあったが、私は日本海沿岸の青海の化学工場の調査に派遣された記憶がある。

